

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K01064

研究課題名(和文)人文系科目におけるアクティブラーニング推進のための大学初任教員支援に関する研究

研究課題名(英文)A Study on Supporting Junior Faculty to Promote Active Learning in Humanities

研究代表者

田口 真奈 (Taguchi, Mana)

京都大学・高等教育研究開発推進センター・准教授

研究者番号：50333274

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、アクティブラーニングの実践が進んでいない人文系科目において、特に経験の浅い大学初任教員の支援となるようなプログラムを開発し、当該プログラムで実証的に得られた知見を活かし、教員が利用可能なツールを開発し、実践知を蓄積・共有することである。従来型の授業検討会の効果と限界を談話分析より明らかにしたうえで、アクティブラーニング型授業を多様な大学の受講生に対して実施する授業に参画した。特に初任教員にとって、アクティブラーニング型授業をデザインする際に困難となる点を明らかにし、新たに、「アクティブラーニング型授業のためのマトリックス」を開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アクティブラーニングが進みにくい理由は、それが実学と結びつきにくいこと、従来の一斉講義型授業で十分に学びに動機づけられた者が大学教員となっており、いわゆるアクティブラーニング型授業の効果や必要性が認識されづらいこと、自らが経験したことのない授業形態を開拓していかなければならないことなどがあげられる。本研究では、こうした新しい試みは、単に「指摘」をするだけでは実践の推進には不十分なことを明らかにし、実践モデルとなる授業やツールが必要であることを明らかにした。また、サポートツールを開発し、アクションリサーチを通じて、実践知を蓄積・共有に貢献した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to develop a program and tools that will support junior faculty who have little experiences conducting active learning class in humanities. After clarifying the characteristics of the session discourse and its influence on the subsequent teaching practices, I participated in a discussion to design the active learning class for students of various universities. And clarifying the difficulties in designing active learning class, a "Matrix for Active Learning" have developed.

研究分野：教育工学

キーワード：アクティブラーニング 教授法開発 授業デザイン 実践知の可視化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

大学教育段階では、ユニバーサル化による大学生の多様化への対処の一つとして、一斉講義型授業を脱却するという意味でのアクティブラーニングが推奨されてきたという経緯がある。それに加えて、現在求められているのは、知識偏重型の教育から脱却し、21世紀型スキル等を獲得させていくことであり(溝上、2014) 初等中等段階から、その教育方法の一つとして「アクティブラーニング」型授業が推奨されている。一方、知識獲得の側面に関しても、単位取得が目的となり、授業内容を相互に関係のない知識の断片とみなす「浅い学習」ではなく、主体的に概念を理解することを目的とし、概念を既有知識や経験に関連づけ、共通するパターンやその基礎にある原理を見出そうとする「深い学習」(Marton & Säljö、1976) が目指されなければならない。

こうした「ディープ・アクティブラーニング」(松下ほか、2015) は、特に PBL などの手法を導入しやすい工学系科目、あるいは社会科学系科目では比較的導入が進み、それに関する実践研究も行われている。一方で、人文科学系科目においては、哲学の授業における実践事例(田口・松下、2015) はあるものの、実践はあまり進んでいるとはいえない。

人文系科目において、アクティブラーニングが進みにくい理由の一つとして、それが実学と結びつきにくいことが挙げられるだろう。また、従来の一斉講義型授業で十分に学びに動機づけられた者が大学教員となっており、いわゆるアクティブラーニング型授業に懐疑的な風潮もある。そうした中、大学初任教員は、自らが経験したことのない授業形態を開拓していかなければならないという実践上の課題を抱えている。

2. 研究の目的

本研究は、アクティブラーニングの実践が進んでいない人文系科目において、特に経験の浅い大学初任教員の支援となるようなプログラムを開発し、当該プログラムで得られた教員が利用可能なツールや実践で得られた実践知を蓄積・共有することを目的とするものである。

これまで、京都大学では、特に文学研究科のオーバードクターの支援策として、「文学研究科プレ FD プロジェクト」を展開してきた。これは、人文科学系の大学初任教員として活躍する直前の若手研究者に対して、教育方法に関連する知識・能力・態度の向上を目的としたものである(田口ほか、2013)。ここでは、「教授から学習への視点の転換」を促す「授業デザインワークシート」(田口ほか、2011)、事前・事後研修会、学部生を対象とした授業とその直後の授業検討会を繰り返すというプログラムを開発、運用してきた。本プログラムを運用する中で、いわゆる一斉講義型形式を脱却しようとする風潮は見え始めてきた。しかしながら、まだ、アクティブラーニング型授業が展開できているとはいえない状況である。こうした問題を打破していくためには、モデルとなる授業やツールを開発し、アクションリサーチを通じて、実践知を蓄積・共有していくことが重要である。

3. 研究の方法

(1) 授業検討会の効果と限界の検討

まず、授業検討会での指摘がアクティブラーニング型授業の導入に至るかどうかを確認するため、2009年度から2018年度まで10年間にわたり文学研究科プレ FD に該当する授業を担当した講師の授業実践を対象として、授業検討会における談話の分析を行った。談話の内容については、柴田(2015)による「教師がおこなう授業づくりの過程とその観点」を用いて分類した。具体的には、1.教材研究、2.授業の設計、3.授業の展開とその下位項目からなるカテゴリを

用いて分類した。談話の様式については、坂本（2012）による「協議会の発話分類カテゴリ」を用いた。これは、初等教育での授業検討会における談話を対象に、授業の具体的事実にもとづく省察に焦点化し、その省察過程を捉えるために作成された分類枠組みである。具体的には、省察過程の軸となる「対象授業の表象」「問題の表象」「代案」の表象の3つの表象概念に、観察事実にもとづいて学生の学習過程や授業者の意図を推測する「推論」、代案には至らないが授業のなかで起こり得た別の展開を想定する「可能性の想定」を加えた5つのカテゴリと、これらのいずれにも該当しない発話を分類する「その他」に分類した。そのうえで授業検討会での談話の内容の出現傾向と、談話内容ごとの形式的特徴を明らかにした。

次に、授業検討会が授業実践に与える影響を明らかにするため、授業検討会後の授業実践のVTRをもとに授業実践を分析した。

（2）コンソーシアム京都での授業実践と検討会をもとにしたワークシートの開発

上記の文学研究科プレFDプロジェクトの発展的プログラムとして、2015年より、新たに大学コンソーシアム京都との連携のもと、単位互換リレー講義「人文学入門」が開講されている。このプログラムでは、プレFD修了生がそれぞれの授業だけではなく、半期15回の講義全体をデザインすること、また、京都大学以外の多様な学生を対象とした授業をすること、さらに、アクティブラーニングを導入すること、などがその特徴としてあげられる（田口・福田、2018）。

この実践において、シラバス作成前のコースデザインの検討、シラバス策定後のそれぞれの授業デザインの検討会ならびに授業実施後の授業検討会に参画し、授業デザインの支援を行う中で、アクティブラーニング型授業デザインを行う際にどこが課題となるのかを明らかにし、それをもとにワークシートの開発を行った。

4．研究成果

（1）授業検討会の限界

授業検討会における談話は、授業内容や説明に焦点化しやすく、授業目標や評価に関するものは出現しにくいことが明らかになった。授業検討会での談話が授業実践に与える影響では、学生からの談話や代案まで提示された談話が反映されやすい可能性が示唆された。一方で、授業実践への反映には、談話にもとづき取組を変化させたものや新たな試みを導入したものだけでなく、実施そのものを取りやめてしまう反映も確認された（香西・田口、2020）。これらのことから、授業検討会の実施だけではアクティブラーニング型授業という新しい授業形態を試みることは難しいことが確認された。

（2）アクティブラーニング型授業の導入の3つの障壁

アクティブラーニング型授業の導入には、以下の3つの課題が存在することが明らかとなった。

1つ目は学生の学習という観点の欠如である。

講師たちは、まず、授業のテーマを設定し、研究論文を書く要領で、前提から結論までのストーリーを考え、それを90分におさめようとする傾向が強い。これまでの事前・事後研修会でも、授業デザインワークシートを活用しつつ「学生の学習」を考慮することの重要性について強調してきたものの、自らの出身大学でもある京都大学の学生を対象とした授業では自らの経験に依拠して「学生の学習」を推測しがちであり、学生の「既有知識」や「興味」を確認する必要性を実感されにくい。しかしながら、コンソーシアム京都での授業は、様々な大学の学生が参加するため、学生の既有知識や授業への参加動機は多様である。目の前の学生に何を学習させるのか、また、それはシラバスに記載された目的とどう関係するのかという観点から、授業の目的を絞り

こむことが最初の最も大きな課題であった。

2つ目は、内化と外化のデザインが不十分な点である。

アクティブラーニング型授業は、学生が「読む・聞く」以外の活動を含む。「アクティブラーニング型授業」を実施しなければならないといわれた講師は、そのための時間をどのように捻出するのかについては意識が向くが、なんのための外化であるのかについて意識づけが必要であることがわかった。例えば、ある講師は、初回の授業デザインとして、講義パートを45分間とし、そのあとは45分間、学生にディスカッションをさせるというデザインを提案したが、講義パートで得られたどのような知識を応用するためのディスカッションであるのか、また、どのようなテーマで、何のためにそのディスカッションをさせるのかについては、まったく検討されていなかった。また、ディスカッションをさせた結果の批評や評価と統制についても検討されておらず、組み込まれていなかった。

3つ目が網羅主義への固執である。

講師たちは、自分が研究テーマとしている分野を扱った授業を展開することが多いが、特にそうした場合に、「授業で何をどこまで扱うのか」の絞り込みが困難であることがわかった。ある講師は、授業デザインを検討する段階で、そのテーマでは90分の授業には収まらないことを指摘されても、「このトピックを外してしまうとこのテーマを扱ったことにはならない」と主張し、「90分以内でなんとかしゃべりきる」ことを選択しようとする。こうした網羅主義に陥りやすいのは、自らが興味をもって探求しているテーマであればこそ「削除する」ことを非常に困難に感じるということがわかった。

(3) アクティブラーニング型授業のためのマトリックスの開発

以上のことから、まず、授業の目的を吟味させること、次に、学生が主体的に考えるための教材・題材(ネタ)を検討し、外化のパートから授業をデザインさせること、の2つを実現させることを主軸としたマトリックス型のワークシートを開発した。

具体的には、アクティブラーニング型授業を実施するためには、特に学生の「学習活動のデザイン」が重要になること、そのために、「授業目的の明確化」、「学生の実態把握」が欠かせないこと、「学習環境のデザイン」も必要であることを図示(図1)し、それらを縦軸とし、以下の4つの観点を横軸とし、それぞれを検討したうえで、結果を書き込むものである(図2)。

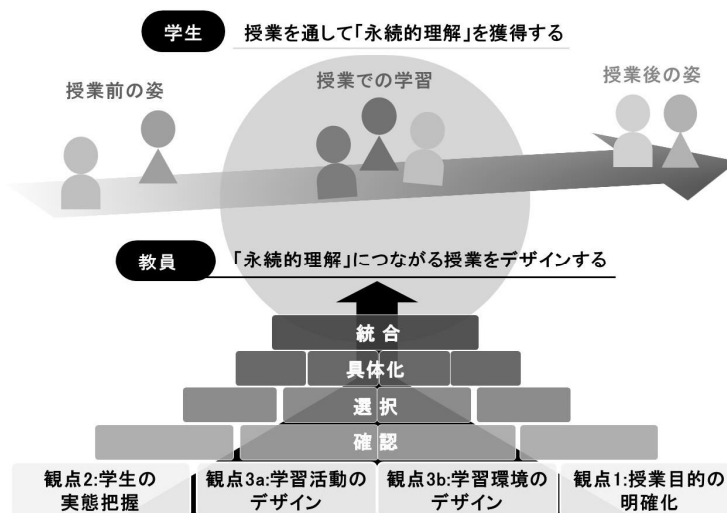


図1 授業の役割とアクティブラーニング型授業をデザインする際の観点

アクティブラーニング型授業デザインのマトリクス

名前 [] 授業日 []

	観点1：授業目的の明確化	観点2：学生の実態把握	観点3a：学習活動のデザイン	観点3b：学習環境のデザイン
1. 確認	コース全体の目的は？ シラバスに記載したコースの目的を確認する。	学生の基本情報は？ 学部、学年、人数などを確認する。	この授業/単元で取り扱うテーマは？ シラバスなどで公開しているテーマを確認する。	授業を実施する教室環境・使用できるツールは？ 教室の広さや座席の状態（机は固定？可動式？など）を確認する。 教室で使用可能なツールを確認する。 教室外で利用できる学習環境を確認する。
	この授業/単元の目的は？ この授業/単元で目指す「永続的理解（忘れ残り）」を決定する。	この授業/単元に関連する学生の既有知識・興味関心は？ 学生がこの授業/単元を学ぶために必要な知識やスキルを挙げる。 学生の興味関心のうち、授業で利用できるものは何かを考える。	学生が主体的に考えるための教材・題材（ネタ）は？ 「永続的理解」につなげるための教材・題材（ネタ）を選択する。 発問は？ どのような発問で学生に「考えさせる」のかを決定する。	授業を実施するために必要な学習環境やツールは？ どのように教室やツールを使用するのかを選ぶ。
3. 具体化	この授業/単元の目的を学生にどのように伝えるのか？ この授業の目的と評価方法を、いつ、どのように学生に伝えるのかを考える。	学生の既有知識・興味関心を、いつ(授業前/授業中)どのように 上記の項目について、学生の実態を確認するための活動を具体的に考える。	教材・題材（ネタ）を用いてどのような学習活動をおこなうのか？ 学生は具体的にどのような活動をおこなうのか？ 様々なAIの手法を参考に具体的な活動を考える。	授業までに準備すべきことは？ 事前に準備が必要なツール、教室環境の設定を
			活動はどのような単位でおこなうのか？ 個人/ペア/グループ/全体	
			この活動の前後に何をおこなうのか？ 学習活動の前提となる知識伝達や、活動の結果のアウトプットの方法を考える。特に、講義と活動の接続を考える。	
4. 統合	「授業デザインワークシート」を用いて、各観点で検討した内容を授業の流れにそって統合する。			

図2 アクティブラーニング型授業デザインのためのマトリクス

引用文献

- 田口真奈・出口康夫・京都大学高等教育研究開発推進センター編著 2013 『未来の大学教員を育てる 京大文学部・プレFDの挑戦』勁草書房
- 田口真奈・松下佳代 2015 「コンセプトマップを使った深い学習 哲学系入門科目での試み」
- 田口真奈・松下佳代・半澤礼之 2011 「大学授業における教授のデザインとリフレクションのためのワークシートの開発」『日本教育工学会論文誌』第35号第3号 269-277頁 勁草書房
- Marton, F. & Säljö, R. 1976 On qualitative differences in learning. I. Outcome and process. British Journal of Educational Psychology, 46, 4-11
- 溝上慎一 2014 アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換 東信堂
- 柴田義松 2015 『教育の方法と技術 改訂版』学文社
- 坂本篤史 2012 「授業研究の事後協議会を通じた小学校教師の談話と教職経験:教職経験年数と学校在籍年数の比較から」『発達心理学研究』、23(1) 44-54頁

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 香西 佳美、田口 真奈	4. 巻 43
2. 論文標題 大学の授業検討会における談話の特徴と初任教員の授業実践への影響	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 421 ~ 432
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.15077/jjet.43063	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 岩田 貴帆、田口 真奈	4. 巻 43
2. 論文標題 パフォーマンス課題における自己評価力を高めるための協議ワークを取り入れた相互評価活動の開発	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 173 ~ 176
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15077/jjet.S43095	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Shibukawa Sachika, Taguchi Mana	4. 巻 31
2. 論文標題 Exploring the difficulty on students' preparation and the effective instruction in the flipped classroom	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Computing in Higher Education	6. 最初と最後の頁 311 ~ 339
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s12528-019-09220-3	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 澁川 幸加、田口 真奈、西岡 貞一	4. 巻 26
2. 論文標題 反転授業におけるワークシートの利用が対面授業時の学びへ与える影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育メディア研究	6. 最初と最後の頁 1 ~ 19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24458/jaems.26.1_1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田口 真奈、後藤 崇志、毛利 隆夫	4. 巻 42
2. 論文標題 グローバルMOOC を用いた反転授業の事例研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 255 ~ 269
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.15077/jjet.42074	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takayuki Goto and Mana Taguchi	4. 巻 16
2. 論文標題 Motivation for learning in Massive Open Online Courses differs according to the learners' socioeconomic backgrounds: Meta-analytical results of synthesizing seven courses	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間環境学研究	6. 最初と最後の頁 17-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.4189/shes.16.17	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田口 真奈、福田 宗太郎	4. 巻 41, Supple
2. 論文標題 コースデザインと授業実践を含むブレFD プログラムの開発 大学コンソーシアム京都における『人文学入門』を対象に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 153 ~ 156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.15077/jjet.S41085	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 梁 琳娟、田口 真奈	4. 巻 42
2. 論文標題 中国における大規模語学教育プラットフォーム「瀘江」の教授機能分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 173 ~ 176
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.15077/jjet.S42093	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 香西 佳美、田口 真奈	4. 巻 41
2. 論文標題 MOOC での授業実践の経験を通じた大学教員の授業力量形成	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 449 ~ 460
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15077/jjet.41066	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田口 真奈・香西 佳美	4. 巻 1
2. 論文標題 大学におけるアクティブラーニング型授業デザインのためのマトリクスの開発	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本教育工学会研究報告集	6. 最初と最後の頁 37-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Takaho Iwata・Mna Taguchi
2. 発表標題 A review of practical researches implementing peer-assessment activity for development of students' capability of self-assessment : focusing on activities for integration of self-assessment and peer-assessment
3. 学会等名 WERA 2019 Focal Meeting (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 香西佳美・田口真奈
2. 発表標題 実践的な授業力量形成を目的としたプレFDプログラムの効果検証 京都大学文学研究科プレFDプロジェクト参加者への追跡調査
3. 学会等名 日本教育工学会第35回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sachika SHIBUKAWA, Mana TAGUCHI
2. 発表標題 How Students Prepare in Flipped Classrooms: A Case Study in a Physiology Class.
3. 学会等名 International Symposium on Educational Technology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 香西佳美・田口真奈
2. 発表標題 AL 型授業の実践経験が大学初任教員の授業力量に与える影響 - 授業デザインおよび授業観の変化に着目して
3. 学会等名 日本教育工学会第34回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩田貴帆・田口真奈
2. 発表標題 自己評価能力を向上させるための相互評価活動を促進するワークシートの開発
3. 学会等名 日本教育工学会第34回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 香西佳美・田口真奈
2. 発表標題 ブレFD プログラムにおける授業検討会の意義と限界 授業検討会における談話の変化に着目してー
3. 学会等名 日本教育工学会第33回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 澁川幸加・田口真奈
2. 発表標題 反転授業におけるワークシートの利用が対面授業時のグループディスカッションの発話内容に与える影響
3. 学会等名 日本教育工学会第33回全国大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 吉崎静夫、村川雅弘、木原俊行	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 228
3. 書名 授業研究のフロンティア	

1. 著者名 Mana Taguchi and Kayo Matsushita	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 21
3. 書名 Deep Learning Using Concept Maps: Experiment in an Introductory Philosophy " Course " " Deep Active Learning Toward Greater Depth in University Education "	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	福田 宗太郎 (Fukuda Sotaro) (20761878)	京都大学・高等教育研究開発推進センター・特定研究員 (14301)	2016年度限り